

山中に入ったミチは、その日の宿を何とかしなければ、と思案しながら通りを歩いていると、右手の少し奥まった場所にある共同浴場から、湯気がもうもうと道に溢れているのが目に入った。

初老の女が一人、湯気に向かって歩いてるのに惹かれるように、ミチもそちらへ向きを変えた。

「おや、尼さん、あなたもお湯ですか？」とミチを振り返った女に問われて、はっと、湯銭も持ち合わせていないことに気付いた。

湯の煙に惹かれて近づいてはみたが、迂闊な自分がおかしくなつて

「いえいえそういうわけでは・・・」と曖昧な笑い顔で応えた。

すると女は

「此処は元湯でね、何軒もの温泉宿にお湯を分けているのさ。宿で温泉に入ると金が要るけど、ここは共同浴場で、ただ。今時分だと男衆は居ないはず、入って行ったらどうです。」とミチを誘った。

それならば、と誘われるままに湯に浸かり、思いきり手足を伸ばしてみた。

肩の力が次第に抜けて、やがて背中から腰、更に太ももか

らふくらはぎを伝い、ついには足先から旅の疲れが一気に抜けてゆく感覚にうっとりとしていた。

女はちえと名乗った。越前小浜の出だと言った。

「尼さんはまだ若そうだけど、つらいことが有ったんだろうねエ。だから尼さんになったんだろ。」と言いながら、ミチに並んで両足を精一杯伸ばしたまま、問わず語りに自分の身の上話を始めた。

相手が尼なので、気を許したのかも知れなかった。

「私も苦勞をしたさ。家は三代続く履物問屋でね、養子を取つて跡を継がなくちゃならない立場だったんだけどさ。十八の年に、同じ小浜の呉服問屋の三男と養子縁組の話になったのはいいんだけど、わたしやどうしてもその気になれなくてね。何故か？そうだねエ、今となれば若気の至りというのかねエ。その頃、何となく気になる男がいてさ。別に言い交したわけではなかったんだけど、うちの店に十日おきに仕上がった下駄を届けに来ていた、佐助という、まだ年季の明けない職人のことが何となく気になつたのさ。」

ちえはそういうと、昔を懐かしむように幽かな微笑みを浮かべ、遠くを見つめる目を、明り取りの格子の向こうの、夕焼けに染まった空に投げた。

浴場の前でミチを振り返った時は、目尻のあたりに小じわが見え、乾いた肌が知命あたりかと思わせたが、今、隣に並んだちえの首から下の皮膚は透き通るように白く、湯気で潤

いを取り戻した顔は、どう見ても四十そこそこ、いや、もう少し若いかも知れないと思えた。

物言いは、大店の娘だったにしてはどこかはすっぱな感じがするが、それは今の暮らしの有りようを語っているのかも知れなかった。

「どんだん縁談が具体的になる或る日、私しゃ、もうそうしなければ居たたまれなくなつてね、品物を届けに来た佐助を広嶺神社の境内に連れて行き、こう言ったのさ。佐助さん、あなた私のこと、どう思う？すると佐助はね、びつくりした目を私に向け、どう思うと聞かれても私はまだ半人前の職人。大店のお嬢さんのことをどう思うなんて答えられません、と言うのさ。それで私が、大店なんて話は抜きにしてどう思う？つて聞くと、そりゃあ、届け物の度にお嬢さんを見かけると、こんな人と所帯を持てたらどんなにいいだろう、なんて考えたこともありましたが、そんなことは所詮、夢の又夢、どうにもなるものでもありません。と言うもんだから私しゃ言ったんだ。一度でも私と所帯を持ちたいと思つたのなら、実行してちょうだい。私の周りでは、私の縁談がどんどん進んでいるの。残りの時間が僅かになつて、私を助けられるのは佐助さん、あんたしか居ない。お願いだから私を連れて逃げて。と言うと、佐助は随分長い間目をつぶつて何かを考えている様子だったけど、目を開けた時には、分かりましたお嬢さん。加賀の小松に遠い親戚があります。そこへ行き

ましよう。そう言つてくれたのさ。」

「三日後の七つ(午前四時頃)、広嶺神社で落ち合った時は嬉しかったね。明るく輝く未来が待っているとしか思えなかった。国ざかいを越えた時はもう、叫びだしたいくらいだったよ。ところが、小松に着いてみると、当てにしていた佐助の親戚は絶えてしまつていてね、それからが大変だった」

遠くをみつめながら話していったちは、ふつと視線を落とすと小さなため息をついた。

そして大きく肩で息をしたのは、これから話すことにはずみをつけたのだろう。

ちはは、思いついたようにミチに顔を向けると、今日の宿は何処かと聞いた。

山中に入ったばかりでまだ決めていない、と応えるミチに「だつたらうちに泊まつてかない？どうせ独り暮らしで何の遠慮もいらぬからさ」と勧めたおいて思い出話を続けた。

「佐助の遠戚になる一家は、なんでも流行り病にやられたらしく、親子四人がわずか三月の間に全員亡くなつたらしいんだよ。一家が亡くなつた後に住んでいる、という人が、もう二年になると言つてた。こんなことつてあるんだねエ。私はどうしていいんだか、まるつきり途方に暮れてしまつてね、目の前が真っ暗さ。」

佐助の奴は、自分は親方の所を断りも無しに抜けて来たの

で帰るに帰れないけど、お嬢さんあんたには帰る家がある。国ざかい迄送るから帰れと言うし、本当にどうしていいのかわからなくなつてわんわん泣いてしまった。

でも帰る気になんかなれなかった。今住んでいるという人に頼み込んで、母屋とは別棟になつている農具をしまつておく小屋に寝泊まりすることになつたんだけど、地べたにムシ口を敷いただけで寝るのは辛かつたねえ。臭いし寒いし。

佐助にしがみついても、あいつは丸太ん棒みたいに硬直してしまつてちつとも抱きしめてくれない。昼間は仕事と住む家を探して歩くんだけど、訳あり気な二人に家を貸す人なんかいないのさ。

半人前の下駄職人に仕事もみつからないまま何日か過ぎた朝、私が目を覚ますと佐助が居なくなつていた。俺と一緒にだとお嬢さんは家に帰ろうとしない。今の内に帰つたほうがお嬢さんには幸せだ。みたいなことを書いた紙きれが残つた。馬鹿だよあいつは。人の気も知らないで。」

そう言つてちえは、両の手にお湯をすくつてゆつくりと顔を濡らした。

「元はと言えば私が蒔いた種なんだけど、佐助にすれば私の目の前から消えてしまうことが、私への思い遣りだつたんだらうね。時々何処でどうしてるかな、なんて考えるけど、それつきり会つた事も噂を聞いた事も無い。

考えてみると、私の所為であいつの人生まで滅茶苦茶にし

てしまつて、ほんと、悪かつたなつて思うよ。」

「私かい？それから一日泣き明かしたらさ、気持ちか吹つ切れたらしくて、よしそれじゃ一人で生きてみよう、と思つてみつけたのが小料理屋の住み込み。右も左も分からないまま夢中で働いたね。

一年ほどたつて、やつと落ち着いて回りが見え始めた頃、いつも気前よく心づけをしてくれるちよいといなせな男がいてさ、こいつに、俺と所帯持たないか、なんて言われてころりと参つたのが運の尽きさ。

初めの二月三月は猫を被つていたけど、とんでもないやぐざ者の正体が見えてくると、もう毎日が地獄だった。働きもしないで遊んでばかり。金が無くなると私に前借をさせる。それが何度も続けば店の方だつて当然断るじゃないか。そうすると殴る蹴るだろ。

そればかりじゃないよ。しまいには客と寝て稼いで来いと言う。私は生きた心地がしなかった。それでも泣く泣く何度か客を取らされて、あいつが遊びに出た隙に必死で逃げだしてここまで来たつてわけ。

ところがさ、店にも誰にも言わずに逃げて来たのに、あんちくしょうは蛇みたいな奴でさ、半年もしない内に見つかつてしまつたよ。」

ミチは、ただく、目を見張つてちえの転落の話を聞くだけだつた。

大店のお嬢さんが、ある時ある出来事を境に、今までとはまるで逆の人生を歩くなんて、考えも及ばないことだった。道端の小石につまずいた所為で、大きく変わってしまった女の半生だった。

「見つかつた後かい？もうどうにでもなれつて気持ちになつたね。折角温泉宿の仲居の仕事をみつけていたのに、しょっちゅうあいつが金をせびりに来るもんで、宿の方じゃ気味悪がつて首。

それからはずっと水茶屋勤め。半年前に、酔っぱらつたあんちくしょうは、鶴仙峡の橋から落ちて死んじまつた。

こんな年になると、客もつかなくなつて、もつともあいつが死んじまつたので客を取る必要も無くなつて、今はさつぱりしてるよ。これから仕事だけど、尼さん、あんたはうちに泊まつとくれよ。四つ半には戻るからさ。」

ちえは、並んで湯に浸かっているミチの手を、両の掌で包んでそう言った。

不運だった女の過ぎて行つた過去が、ちえの手から伝わつてミチの胸を苦しくした。ちえは、誰かに総てを話すことで、忌まわしい過去に区切りをつけようとしているのではないだろうか。

私で用が足りるのなら、存分に話を聞かせてもらおう。ミチは、そう考えて残る片方の手をちえの手に重ねた。